資料紹介

頼朝下文など新史料発見

―県史料刊行会の庄内郷史料調査―

九州大学教授　竹　内　理　三

七月十日大分郡庄内町成立を記念して編集された「庄内郷土誌」刊行記念会を機に、大分県史料刊行会では大分県地方史研究会と協同し、庄内郷土史講演会と同町内の古文書研究会を催したが、学界に幾多の波紋を投ずべき貴重な収穫があった。

中にも曽根崎元一氏文書は、文治三年（AD一一八七）源頼朝の下文以下鎌倉室町時代にわたる文書で、蒙古合戦勲功恩賞の文書、肥前国大田文の断簡などを含み、全く学界未見の新史料である。源頼朝の下文は、曽根崎氏の祖先平通隆が、筑前権守高経と、肥前国曽称崎の地の地頭職を争い、頼朝が裁断を下したもので、この時、その地が平家の旧領であったことゝ、曽称崎氏が源氏に属していたことが知られ、数少い頼朝の文書として尊重すべきものと思われる。また肥前国図田帳は、建久八年のもので、この年のものとしてはこれまで薩摩・大隅・日向の三ケ国が知られているにすぎなかつたが、今回の発見で、新たに一ケ国を加え得たわけである。数年前、同じく大分県史料刊行会の手により、宇佐神宮永弘家の文書の中から豊前国図田帳の残簡が発見され、両者と併せて学界に大きな貢献をなすものであることは疑いない。豊前国図田帳も建久八年のものと推定されるので、これで県下から同年の新しい図田帳が二ケ国も発見されたわけで全国にも珍しい現象である。ただ両者共に江戸時代の新写であることは遺憾であるが、これによつて将来の、さらに完全なものの発見に希望がもたれる。

特に曽根崎文書の原文書は江戸時代に同家の本家が伊予に移住した際にもち去つて、現在あるものは元禄ごろの新写ではあるが、原文書所在不明である今日、実に貴重というべきである。

つぎに首藤忠正氏所蔵文書は、森山流算法による測量術に関するもので、測量術に関する図巻は江戸時代の距測術を図で詳細に示した虎の巻で、慶応四年の文書には、宇佐郡広瀬井手の普請に「間法」をとり入れてすこぶる功をおさめたことを記し、二豊の幕末洋学史上注目すべきものである。

なお、さすがに府内のおひざもとだけあつて大友氏関係の文書も多く、特に田北一六氏所蔵文書は、建武元年尊氏判のある文書以下約五十通に及び、小野信夫氏所蔵文書と共に、大友氏研究には不可欠のものである。このほか田中晴夫氏の庄内郷古地図、小川正夫氏の仙崖の画賛、熊野神社の縁起や、菖浦清一氏、大津留克己氏、小川照男氏、大津末記氏所蔵文書は庶民史料として、庄内の歴史と文化を伝えている。

大分県史料刊行会の古文書調査は毎年数回ずつ行われ、そのたびに学界未知の史料を発掘し、二豊の歴史の豊さに驚かされるが、特に今回はその驚きを一層深くした次才である。それにつけても、山路はるかに貴重な古文書を持参せられた諸氏お、よび今回の挙を実施された立川輝信氏をはじめ二宮教育長、曽根崎校長、疋田校長、小野教育委員長その他教育関係諸氏に謝意を表する次才である。

なお本調査には県史料刊行会ならびに県地方史研究会関係者として清原貞雄博士、渡辺澄夫、兼子俊一、久多羅木儀一郎、中野幡能、三木俊秋の諸氏が参加した。